

周而復著

上海の朝

上海の朝

第一部 ■ 上巻

周 而 復 著
岡 本 隆 三 訳
伊 藤 敬 一



くろしお出版

1959



《訳者の略歴》

おがき もと りゆう どう
岡 本 隆 三

1916年 静岡県藤枝市に生まれる。

1937年 東京外国語学校中国語部卒業。

現在： 横浜国立大学助教授。

おもな著書・訳書：「鲁迅選集」，「老舍作品集」，「丁玲作品集」，「毛沢東思想と創作方法」（監修），「新・十八史略物語」（共著），その他。

現住所： 横浜市南区大岡町 8 9 3

いとう けい いち
伊 藤 敬 一

1927年 名古屋市に生まれる。

1950年 東京大学中国文学科卒業。

現在： 東京都立大学中国文学研究室に講師として勤務。

おもな論文：「老舍論」，「胡風批判について」，「鲁迅について」，その他。

現住所： 東京都目黒区柿の木坂97・東京都立大学職員寮

検印

廃止

上海の朝 第一部 <上巻>

定価 290円（送料 24円）

1959年11月1日 第1版を出す

1960年1月10日 第2版を出す

Kakite: Zhou Er-fu 周 而 復

Yakusite: 岡 本 隆 三

伊 藤 敬 一

Hanmoto: くろしお出版

東京都 千代田区 神田小川町 3—24

電話：(29) 3557・振替：東京31301

組みと刷り：東洋経済新報社印刷工場・製本：明泉堂

（ページ落ち、ページ乱れの本は、おとりかえいたします。）

読者のために

新中国の国旗には五つの星が描かれている。大きな星の中国共産党を中心に労働者・農民・小資産階級・民族資産階級などとの強い団結を表わす。この小説は、一口に言えば、解放後から一九五二年ごろまでの期間における、この五つの星の物語である。ルンバをやっているキャバレージャズハイの前を朝鮮戦線から来た人民解放軍の兵士が通る。そういう変転きわまりない上海で、特に資本主義商工業が改造されていく過程、人民政府が政治的経済的基礎を固めていく戦いが、大きなテーマになっている。こうしたテーマと結びついている登場人物の計算された動きを、平凡な十九世紀的手法による描写として見のがさないためにも、読者は、当時の資本家や人民政府・労働者の動きを知っておかれる必要がある。

新中国は、一九五〇年になって、十二年来のインフレをおさえ、経済安定の第一段階をむかえた。五一年には土地改革が基本的に完成し、基本建設がはじまったうえ、朝鮮戦争の爆発で、社会の購買力がふえて、経済が好転してくると、資本家の利潤もふえてきた。

また、資本家の地位や利潤は、のちに憲法となった共同綱領で保証され、政治協商會議、人民代表大會、人民民主統一戰線にも資本家の代表を送っていた。朝鮮戦争でアメリカが勝つだろうという思わくもあった。ながいあいだ民族産業を圧迫していた外国企業も中国から姿を消していた。そういう情勢のなかで、自由主義經濟を復活させようとする動きが出てきたのである。一方、人民政府は、国营工業・公私合营工業をはじめ、本書に登場する中国糧食公司・中国綿糸布公司などの国营商業会社をつくり、私营商工業に対しては、これを利用・制限・改造する方針をとり、委託加工・注文生産（商業は、一括購入と販売）の數量をしだいにひろげて、その公私合营化をはかった。労働組合を指導して資本家に協力させ、労資協商會議をつくらせて生産を協議させ、進歩的商工業者団体である中国民主建国会に援助を与えた。私的資本主義企業の消滅が目的である。

こうした情勢のなかで、私营商工業者は、物価の不安定に乗じて反撃に転じ、本書にあるような外国為替のヤミ買い、パーティなど秘密組織によるレジスタンス、脱税、情報買取、投機、スパイによる労組かく乱を行なった。一九五二年上半期の五反運動は、こうして起こったが、この五反運動の契機となったのが三反運動である。三反とは汚職・浪費・官僚主義の三つの人間惡に反対する運動で、五反が資本家にほこ先を向けたのに対して、

三反は政府部内——公務員や党員の汚職・腐敗を追求したのである。汚職者の九〇パーセントが国民党時代からの留用員であり、とくに会計監査制度の不備によるものが多かったが、本書に登場する方字や張課長はまさにその典型といえよう。私営企業を中心である上海では、商工業者三五一戸の九九パーセントが脱税を行ない(一九〇)、商工業連合会や同業組合が三悪に利用され、公務員や党員に対する誘惑は、その出身地を調べ、趣味や性質を採って、金銭を贈ったり婦女をあてがったりした。本書でも、課長をたらしこむダンサーが登場する。三反運動が一種の思想改造運動であったことを物語っているといえよう。

上巻では、主として以上のような、資本家の攻勢と三反運動前後の魔都上海の姿を描いている。三反運動における人民政府の反撃と摘発の実態は、下巻において展開されるが、それは当時の上海市長陳毅チンシイの指導下に労組を通して行なわれた。資本家は、なおも三反運動を利用して攻撃の手をゆるめなかったが、五反運動で自分たちにほこ先が向けられてくる不安におびえていた。本書の秘密パーティの会話を通して、この不安がとらえられている。しかし、著者が、動揺する資本家の心理や女のしりを追いまわす労働組合員を通して、「人間」の内部に眼を注いでいる点にも、読者が関心をよせられるようお願いしておきたい。

「上海の朝」の主要人物

徐義徳(鉄算盤) 滬江紡績の社長。資本家グループの主要人物。

梅佐賢(酸辣湯) 滬江紡績の副工場長。徐を助け生産サボタージユ、脱税、労組攪乱などに動く。

朱延年 福佑薬局の支配人(経営者)。徐義徳の義弟。不正な取引でもうける商業資本家。

朱暮堂(朱老虎) 悪徳地主。漢奸(対日協力者)で国民党員。徐の第二夫人朱瑞芳の従兄。

馮永祥 資本家(毛織物、たばこ)。商工連合会の委員。資本家グループ結成に暗躍する。

江菊霞 資本家。労資問題の權威。紡績同業組合の委員。徐義徳の愛人。

林宛芝 徐義徳の第三夫人。元滬江紡績のタイピスト。馮永祥の愛人。

馬慕韓 青年資本家(紡績)。民主党派で、人民協商会議の委員。資本家グループ中の唯一の進歩的意見の主張者。

湯阿英 滬江紡績の女工。地主朱暮堂に迫られて上海へのがれる。労働強化で過労のため流産する。

張學海 湯阿英の夫。労働者。労働強化で過労のため流産する。

秦媽媽 湯阿英の女工。共産党員。湯阿英の同郷人。

余静 滬江紡績の党支部の書記。解放前からの共産党員。夫の喪国強は解放直前に虐殺された。

趙德宝 年配の共産党員。滬江紡績の党支部の組織委員。労組の副委員長。

鍾珮文 滬江紡績労組の文教委員。

陶阿毛 滬江紡績労組委員。国民党時代からの資本家側のスパイ。

管秀芬 滬江紡績の労働者。

楊健 中国共産党上海長寧区委員会統一戦線部長。三反五反運動の指導に当たる。

湯富海 阿英の父。貧農。

方宇 税務局員。国民党時代からの留用人員。梅佐賢に買収され情報を提供する。

張課長 蘇北行政署衛生処の課長。朱延年に買収される。

上海の朝

第一部

△上
卷▽

そ
う
て
い
高
野
八
と
び
ら
の
カ
ウ
ト
王
榮
處

アスファルトに、スッスツと静かな音を立てながら、

黒ぬりの小型オースチンが遠くからはしってくる。大通りの両側には、きちんとぎりの木が立ちならび、木の根元のところに去年ぬった白い石灰はもうはげはじめている。枝先の、緑でつやつやした、幅の広い、大きな葉が風をうけて、かすかにゆらいでいる。大通りは人影もまばらで、ひっそりと、なにひとつ聞こえない。空は晴れわたり、午後の日ざしがぎりの陰影をアスファルト道路に落としているのが、なにか一枚のみごとな図案画のようであった。小型オースチンは、大通りを横切つて、スピードを落とし、ぎりの陰のところへ走ってくる。

そこは、ずっと赤レンガべいが続いていて、そのまん中に二枚とびらの大きな黒ぬりの鉄門がかたく閉ざされていた。鉄門には、獅子頭の金色の鉄環が二つ、目ざしをうけてキラキラ金色に光っている。小型オースチンの警笛が黒ぬりの表門に向かって二三度鳴った。すると、

大きなその鉄門が開いて、前方から立ち上がって出てきたのは銀ねずみ色のカーキもめん（カーキ色でなくてもこの種のもを総称するという）の服をきた門衛で、その右手をさし出して、中の方をさし、小型オースチンを乗り入れさせた。門衛はすぐに表門をかたく閉ざした。なにか悪人でも車のあとについてきて忍びこむのを警戒しているようなふうであった。門衛がやってきて小型オースチンのドアを開くと、中から四十過ぎの中年者がとび降りた。ねずみ色の地に水色のしまの洋服をきて、薄い桃色のネクタイをしめ、長い顔は微笑して両ほにえくぼをみせ、ベッコウぶちの乱視のメガネをかけているそのまなざしが、すばしっこくあたりをながめまわして、なにかさがし求めていた。庭に人影はない。かれはカツカツと奥へはいっていった。

この男は、フイカツ滬江（上海の別名）、紡績工場の副工場長梅佐賢で、別名をツインズ酸辣湯（こしょうと酢のはいったスープ）といった。この別名でよばれるようになったわけは、次のようなしだいからである。

梅佐賢は、紡績工場がはじめからの仕事というわけではなく、料理屋上がりの商人であった。かれの従兄の

裴学良が滬江紡績工場の工場長なので、その縁故をたぐって工場へはいり、はじめは事務主任の仕事をやっているが、最近になって、副工場長に昇進したのだ。裴学良は、日ごろ、病気で家にひきこもっていて、出勤しようとはしなかった。梅佐賢の副工場長というのは、ほとんど工場長とかわらないものになった。

紡績工場での仕事ぶりも、料理屋を出したときとかわらず、金が梅佐賢の手を経る場合は、ちょっぴり甘い汁を吸わずにはおかなかった。たとえば工場で一括購入米を配給する場合はどうかというと、本来なら上海糧食公司から購入すべきであるが、それではピンはねができないとなると、かれは慶豊米穀店から購入した。滬江紡績総務部の職員と工場の職員家族の一括購入米は、ぜんぶ慶豊が納入したが、時には、梅佐賢の黙認で少しばかりかびのはえた米をまぜることまであった。そのときには、梅佐賢の手にはいる特別収入はむろんいっそう多くなつた。みなは一括購入米を食べてかびくさいことに気づくと、むろんいくら不満をいだき、騒ぎ出すことさえあったが、梅佐賢はさらに強い不満の色をうかべて、職員の前で慶豊をのしり、こんな商売するのは自分で

自分の首をしめるようなものだといふのだった。しかし、その次の一括購入米も、やはり慶豊に納入させるのである。事務主任になってから、かれの吸った汁は少なくなぐ、人と共同出資して精米所をはじめたほどである。工員たちは、梅佐賢の手にわたると卵も一まわり小さくなると言ったが、この比喩はけっして言い過ぎではない。上海が解放されたとき、工場内の綿すき機具、皮バンドの皮、綿糸などの物品が、まっすぐかれの家へ運びこまれていき、はじめは保管してしまっておくということであつたが、あとから梅佐賢の持ち物にかわってしまった。

こうしたかれの仕わざは、社長も知らぬわけではないが、とんじやくしなかった。社長がもっとうまい汁を要求すると、梅佐賢はしかるべき方面で、その才能と知恵にものを言わせてみせるからである。社長がまゆをピクリ動かすだけで、社長が何に頭を使っているか、かれにはすぐわかつた。どんなことでも、社長のやろうとすることは、たとえ他の者の手には負えなくても、梅佐賢に会いさえすれば、なんでも片がついた。そのうえ、ある種の仕事は、社長がちょっと暗示を与えさえすれば、そ

れをどう処理すべきか、かれにはすぐのみこめた。かれのいま一つのあだ名を社長、腹中の回虫、というのは、つまり、そういうしだいでつけられたものである。もっとも、このあだ名は長すぎるうえ、かれの一面を説明できるだけであって、口に出して言ってみても、あまりびつたりこないの、このあだ名で呼ぶものはわりかた少なく、呼ぶにしても時たまであつた。

酸辣湯のあだ名は、工場でだれ知らぬものもなかつた。むろんかれは自分のあだ名を知らぬわけではない。そう呼ぶのを耳にすることでもあると、この梅佐賢はほかならぬ酸辣湯で、だれの手にも負えるものではない、と反対にすこぶる得意であつた。いまでは事務主任から副工場長の地位にまで出世し、社長側近のお気に入り、で、だれも指一本ふられるものではなかつた。

梅佐賢は客間へはいつた。白のカーキもめんの服をきた老王が両手にぼんをもつて静かに歩いてきて、いれたての獅峰（浙江の産地）の竜井茶を梅佐賢の前にある低い丸い卓の上においた。梅佐賢は、まるで自宅にでもいるように、ゆつたりとくつろいで、二人がけのソファアーにかけ、老王にちらり目をやって、なごやかに聞いた。

「社長は戻られたかね」

「ただいまお戻りになつて、二階で顔を洗つておられます」

「わたしがお会いしにきたと、お知らせしてくれたまえ。もし用事がおありのようだったら、ここですばらくお待ちしてもかまいませんとな」

老王は、おじぎして立ち去つた。梅佐賢は卓上のスリー・ファイブのかんをあげ、一本ぬきとり、すぐ洋服のポケットから銀色のシガレットケースをとり出し、なに食わぬ顔でスリー・ファイブを自分のケースにつめこんだ。それから、卓上の銀色のロンソンのライターをとりあげ、火をつけて吸いながら、気持ちよさそうに客間のすみにあるグランド・ピアノの方をながめた。ピアノのうしろは仕切りの大きなガラス窓になっている。丸い花をぬいとりしたクリーム色の絹の窓のカーテンごしに、かれは窓外の花園の緑のかしわを觀賞していた。

二階からせきをする声が聞こえてきた。梅佐賢は、いい気持ちでくつろいでいた境地から我にかへた。あわててたばこの火を消し、立ち上がって、いまズボンに落ちたたばこの灰をはたくと、薄桃色のネクタイのかけ

うを直した。社長がすぐ降りてくるとわかって、視線を客間の入り口に向けた。はたして階段を降りてくるものがあった。ずっしりとした足音が一步一步ゆっくりと下へ移動してくる。梅佐賢は入り口へいって、貴賓でも接待するように、そこで待っていた。

ずんぐりした中年の男が客間の入り口へ歩いてきた。見るからに堂々たる風さいで、顔は丸い球のように太っていて、あごの肉がたれ下がっているのが、いまにも下へ落ちそうで気になった。見たところ、せいぜい四十ぐらいの年配だが、実際はもう五十近い人である。頭は白髪一本なく、きちんと手入れがゆきとどいて、鏡のようにテラテラ光り、はえがとんできてもすべり落ちそうである。かれは白髪一本ないことが非常に得意で、いつも友人を前において、挫え目な語気で、それを自慢した、「ぼくは白髪の冤えん（そとくことのできない無実のもの）をこうむるで、この年では、もうしらが出るのがほんとうなんだ。ぼくの三人の案内は、ぼくにしらが一本ないことがえらくご不満だが、なかでも正妻がこの頭が白くないことをいちばん恨んでいてね。」「そりゃ、きみが三号をかこやせんかと心配なんだ」、友人がひやかしてそう言お

うものなら、かれは得意で、目をほそめ、口もきけぬほど浮き立って、あとはニヤニヤ笑ってばかりいるのだった。もっとも、上海解放以後は、その言い方が少し修正され、「ぼくの案内は、ぼくがしらが一本ないことにひどくご不満なんだ」と言って、ふつり三人の案内のことは口にしなくなった。

梅佐賢は、かしこまって、滬江紡績社長の徐義徳シュイキョクを迎えた。

「社長、またおじゃまに上がりました」

「早くから来てたんだらうに、待たせたな」

徐社長は、ちらり、かれを流し目でみた。

「どういたしまして、参りましたばかりです」

徐社長がどっかりと、梅佐賢の向かいの一人がけソファーにかけると、ソファーはびっしりふさがった。かれはたばこを一本吸って、どんよりとした目を薄茶色の天井に向けて、口から一つ一つまんまるいたばこの輪を吐き出した。

梅佐賢は子細にその顔色をうかがったが、表情は非常に明るく口はしに時どき悦にいった微笑があらわれた。きょうの社長はいたって気分がよくて、用意してきた用

件を切り出して話してみてもよさそうだと、梅佐賢は見当がついた。

「社長、汕頭^{ウーシュ}から電報が参りました……」

徐社長は、汕頭ということばをきいたとたんに、緊張して、その視線が薄茶色の天井から梅佐賢の長い顔に移った。

「例の荷の具合はどうだな？」

「全部はけました。汕頭へ二十一番手を三百八十^{トナリ}、漢口^{ハンカウ}と広州^広（^広）へ二十番手合計八百三十二^{トナリ}梱積み出しまして、ぜんぶ売りました」

「金額はなんぼだ？」

「合計百二十五万二千四百八十^{トナリ}香港ドルです」

「香港へ振り替えたか？」

「いまは政府の外国為替管理がきびしくなりまして、容易にヤミ買いができません。こんどは数字も小さくなく、あの手この手と考えまして、香港に土着銀行をもっている数軒の店にたのみまして、ようやく振り替えました。そんなわけで、電報がおくれました」

「あの連中のやることとよしたら、いつでもこのろのろしているんだ。汕頭という港は香港とは目と鼻の先だ。

往来も便利だ、広州の得意もおることだし、なにがやりづらなんだ。いくら政府の管理がきびしくても、ヤミ買いの手はいくらでもある。いくら為替手数料が割り増しになっても、たかが知れている」

「さようです」、梅佐賢は、しかし腹の中ではこう考えた。上海の洋館におさまって画策している分には、いたってやさしいことにちがいないが、ほかのものが直接この仕事を扱う段になると、そう簡単にはいかないのだ。まず、政府にしっぽをつかまれないように、まちがいがあるはならぬし、次に、為替手数料が多くなっても頭痛の種で、そろばんの合うようにしなければならぬ……しかし梅佐賢は、口先ではこう言った。

「連中はことを運ぶのが実にのろのろしていて、機転がきけません。政府の取り締まりがきびしいのはなんともありませんが、地獄のさたも金しだい、われわれがその資本を投下しなかった日には大ごとでしょう。広東^{カントン}には毎年たくさん華僑^{カウキョウ}の外国為替が集まっています、われわれがいくらか為替手数料をましさえすれば、必要なだけの外国為替はあります」

「きみの考えのとおりだ。ところで、例の米綿と印綿

は情報がはいったか？」

「荷はもう広州へついております、目下照会中で……」

「連中に早く売りさばかせて、売りさばきたい買いだ……」、徐社長は、そこで口をとめ、しばらく考えてから続けた、「砂糖（米ドルの暗号）の買いだな」

梅佐賢は、かれがきめかねてゐるふうで、そう言つたあと、なお、まゆをよせて考えこんでゐるのをみると、すぐそのあとをうけて、

「にんじん（金塊の暗号）を買えば分に合うのではないでしょうか？ この二、三日、香港の金塊相場は騰貴ぎみで、大手筋は多く買ひです。われわれがにんじんを買えば、かならずまとまつた額のさやがかせげますし、この額はばかにできません」

徐社長は考えもしないで、きっぱりと言つた。

「やはり砂糖がいい。香港の大手筋のやるにんじんの売り買いでは、しゃっちょこ立ちしても、匯豐銀行（香港上海銀行）（國系の為替銀行）にはかなわん。これは大手筋中の大手筋で、さいごはあそこが買ひ通す。われわれはその手は食わん」

「それはそうです」、梅佐賢はとたんに口調をかえた。かれ自身は別に主張があるわけでもなく、主人のきげんさえよければ、かれはなにごととも賛成した。「やはり砂糖のほうがいいことは動かないところです。にんじんを買えば、いくらか利潤を得られる見込みはありますが、しかし危険が多すぎますし、社長が香港にいないとなると、なおさらのことです」

徐社長がうなずいてみせると、梅佐賢はまた言つた。

「もし社長が香港におられましたら、まあなんでしょうな、匯豐銀行も社長にたち打ちできるとはかぎりませんでしょう。社長の豊富な経験をもつて香港市場の変化に即応しつつ独自の行動をとられたら、余人は匯豐にあやつられて醜態をさらしかねませんが、社長は盤石（手をつたふにさいふの身を盤みとする一種の法術といわれるもの。徐義徳のあだ名）でしょう。なんと申しまして、上海で音に聞こえた鉄算（タイチウ）」

梅佐賢にそう言われて、社長は心がほかほかしたがつ、うわべは謙遜（けんそん）して言つた。

「そうばかりともかぎらんがね」

そのとき、突然、カツカツという皮ぐつの音が聞こえてきて、客間の入り口の外まで来たかと思つと、赤い光

のかたまりがちらつと見えた。梅佐賢が聞いた。

「どなたです？」

「いずれあの鼻たれ小僧だろう」

社長は、いかにもうれしそうな口ぶりで言うと、続いて入り口の方に向かって声をかけた、「はいりたければ、かまわずはいっておいで」。すると、入り口に一人の青年が姿をあらわした。まっかな格子じまのワイシャツをきて、洋服のズボンがびんとまっすぐにのび、そのズボンの口がせまいので、すべすべした皮ぐつがますます光って突き出た感じで、黒くてつやの出ているのが、かれの頭髮と同じように人目を引いた。その頭髮は高だかともり上がって、なにやらまっ黒な雲みたい、左右のこめかみにまきついていた。この青年は、第二夫人宋^{ソウ}瑞^{レイ}芳^{ホウ}が生んだ徐社長の愛息であった。

「こんどは、どの手で言いくるめようっていうんだ？ 守仁^{ショニン}、いい年をしてだらしがない、お客さんに会っても声一つかけないのか」

「おお、梅先生」、かれはうわっ調子に声をかけると、それから小ばかにしたように口をまげ、頭をもたげて外の方を向きながら、両手を腰にあて、右足を前に出し、

胸をそらしぎみにして、声もかけたくないといった顔色をしてみせた。梅佐賢は、そんなことにはとんじゃくせず、気にもとめずに、きげんをとりむすんで言った。

「守仁様は、ますますおりっぱにおなりですなあ」

「いやはや、この子どもときたら」、徐社長は、得意げに、自分の愛息をながめた。

「いったい行くんですか？ おとうさん」、徐守仁がふり向いて、首をかしげながら言った。

「行くといったら、むろん行くんだが、ただ……」、徐社長は梅佐賢に相談した。

「佐賢、この子はしきりとアメリカへ勉強にいきがっているんだが、わしはどうもイギリスのほうがいいように思うんだ。紡績という学問では、イギリスが有名だ。勉強がすんだら、戻ってきて、ここの業務の管理の片腕になつてもらえるしな」

「それはむろん、イギリスへ行かれるのがよろしいです。大へんいいお考えです」、梅佐賢はそこまで言ったが、あわててちらり徐守仁をみつめた。このさい、言葉に気をつけなければならぬと感じたのである。社長は愛息のいいなりであつて、愛息の考えにさからうのはま

ずい。さもないと、守仁に一言何か言われれば、梅佐賢はたまったものではなく、しりに帆を上げて逃げ出さなければならぬ。はたして、徐守仁は同意しなかった。

「イギリスだって？ イギリスに、おもしろいところでもあるんですか？ ハリウッドもないし、ぼくは行かない」

梅佐賢は、風向きがよくないとみて、即座にかじを転じた。

「もっとも今日ではアメリカの紡績業もりっぱに発展しています、一部ではイギリスを追いこしています。

守仁様が新技術を少し学んで戻られれば、それこそわが滬江紡績にとって大へんなプラスになりますよ」

「そうですよ！」、徐守仁はとたんに手をたいて、笑い、梅佐賢というやつもそれほどいやらしくはないと思った。

「アメリカへやってやれないこともないんだが、徐社長はそのつど、いつでも愛息の要求に満足していて、言った、「しかしおまえの英語は基礎ができていない。この二三年、セント・ジョーンズの付属中でもみっちり勉強をしとらんし、わしの考えでは、やはりいちおう

香港へ行って、英語の基礎を身につけたらうでアメリカへ行くほうがいいだろう」

「それは、大へん必要なことです、」そう言ったのは梅佐賢だった。

徐守仁は、香港ときいて、すぐ頭に浮かんだが、学友たちの話だと、香港はいいところで、アメリカ映画や、アメリカの洋服や、アメリカのもので：ほしいものは、なんでもあるということだった。かれは、むろん大喜びで言った、「行くんならすぐ行きます、あした出かけます」

「あわてものめ」、徐社長は香港の工場を思い浮かべて、梅佐賢にたずねた、「義信が香港へ運び去った例の六千個の紡錘は、どうしてまだ設備ができないのだ？」

人民解放軍が楊子江を越えたと、徐義徳は、上海はささえ切れないだろうと考えたが、そのときには自分の経営する企業の設備をこっそり運びざる余裕はなかった。しかし全部上海へのこしておくことも業腹であった。そこで弟の徐義信に、六千個の紡錘を香港へ運び去って、工場を新設してもらうことにしたのだった。香港はもってこいの場所であって、国内に何か変化がおければ、そ